

原稿校了後の前兆変化について

八ヶ岳南麓天文台 Yatsugatake South Base Observatory 山梨県北杜市大泉町谷戸8697-1 研究室 FAX 0551-38-4254
Astronomical Observatory: SINCE 1985 Earthquake Forecast Observation & Research: SINCE 1995

No.1778 長期継続前兆 地殻大型地震の可能性前兆 現況報告

直接波近似変動関連前兆継続=初めて体験する現象
発生まで前兆が消えない可能性によって前兆継続中か
8/1±から第8ステージに移行する可能性はあるか

No.1778長期前兆の現況報告です。7/10と7/18-19に顕著化して出現した、八ヶ岳のCH4, CH7の直接波近似変動と、この変動が出現した時から、前兆が顕著化したCH16, CH17, CH21の特異が継続していました。

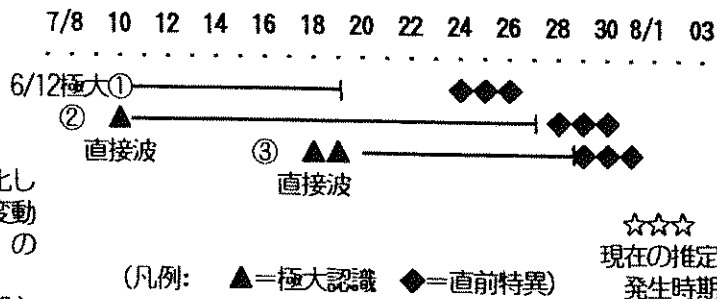
CH17は現在静穏化し、通常基線を記録していますが、CH16とCH21は未だ弱い特異状態が出現しています。

右上図のとおり、①は6/12極大認識の前兆で、7/19に静穏期突入認識ですが、7/25中心に再出現したCH17が直前特異の可能性ががあります。

CH4, CH7の直接波近似変動は、7/10と7/18-19が極大の可能性がありますが、7/10極大に対しては7/27が静穏期の可能性と計算できます。7/27にCH12が静穏化したことから、これに該当する可能性ががあります。7/18-19極大に対しては、本日7/29が静穏期突入の可能性と計算されますが、未確認です。

前兆が完全に静穏化すれば、現在の推定通りの時期に発生と確定できるのですが、現状、直接波変動と関連して顕著化した特異状態が継続出現しています。仮に現推定の8/1±2時期に発生となる場合に、前兆が消えない理由の可能性を考えてみました。上図参照。

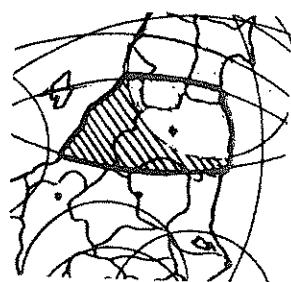
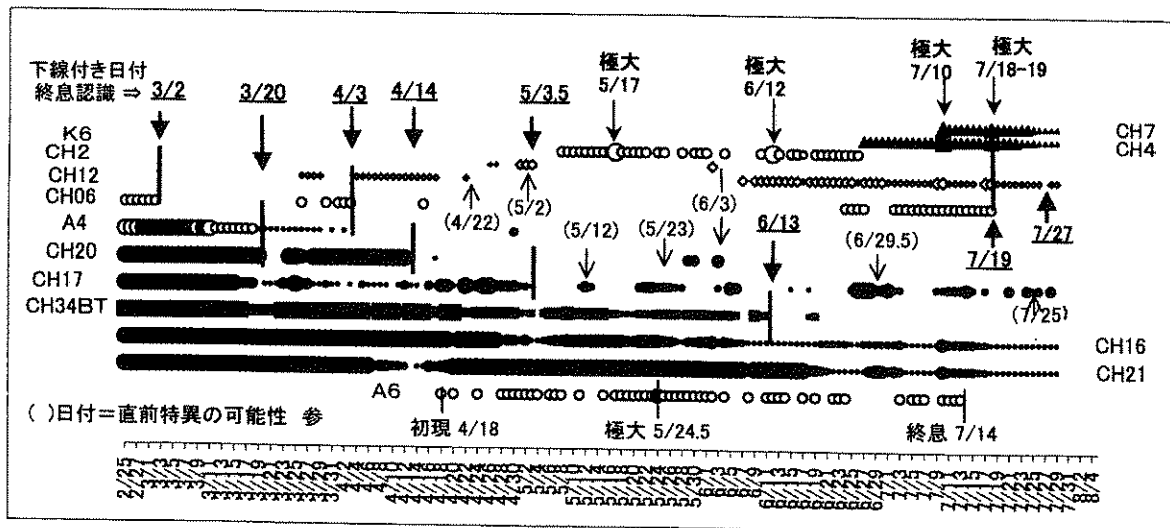
現在までの全極大に対して、全てにおいて直前特異が出現している認識です。7/10, 7/18-19の極大に対して、直前特異が出現する場合は、上図の◆印の時期に前兆が再出現することになります。であるとすれば、仮に8/1±2時期に地震発生となる場合でも、前日又は当日まで前兆が消えないまま地震発生となりえるこ



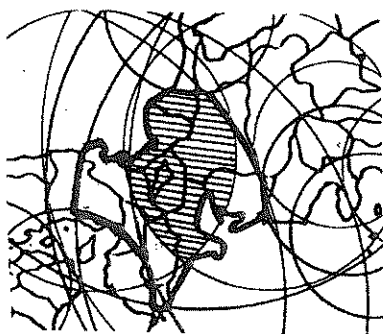
とが示唆されることとなります。

現在、秋田観測点にも高知観測点にも、前兆出現はなく、静穏基線です。八ヶ岳も、直接波近似変動のCH4, CH7及び同時期に再出現したCH16, 21, (12)の弱い特異のみで、他の顕著な前兆もありません。今までの前兆の関係認識が正しい場合、全てが8/1±2時期を示していることから、前述のとおり、前兆が完全終息しなくても、推定通り発生となる可能性も否定はできません。但し、もうひとつの可能性としては、8/1±2時期に極大又は新たな前兆出現開始があって、第8ステージに移行して、発生はまだ先となる可能性も完全否定は困難です。

一応、現推定のまま地震発生に備え、8月3日段階で発生無く、前兆継続又は顕著化した場合には、第8ステージ突入認識で、発生時期を再考するしかないと考えます。



B: 影響局誤認の場合の推定領域



A: 可能性が考えやすい推定領域

- ◆推定領域: 左A図太線領域内
(※斜線域=可能性考えやすい参考推定領域)
(※左図B=変動の向き、影響局誤認の場合)
- ◆推定規模: M7.8±0.5 (M7.5~M7.9考え易い)
- ◆推定時期: 7月31日~8月1日の可能性
(最大誤差=7月30日~8月3日)
(※初めて体験する特殊ケースで前例無い為、難しい。)
(※8月3日迄に発生なく前兆継続の場合は発生日再考)
- ◇推定地震種: 震源30km以内の浅い陸域地殻地震
- ◇推定発生時刻: 午前9時±2又は午後6時±2